
キュープロクスの瞳

エルナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キュプロクスの瞳

【Nコード】

N1998R

【作者名】

エルナ

【あらすじ】

中世の地中海…ヘラクレス（ギリシャ）やグプタ（エジプト）が、まだ少年の頃のお話。想像キャラが大活躍してるので一見何の小説かわかんない（ty

はじめに（前書き）

これから連載していく小説の説明的なものです（＾Ｏ＾）／

はじめに

ども？

これから「キュプロクスの瞳」を連載しようと思っんですが、始めの諸注意です←

- ・一応、ヘタリア地中海のNL小説です。
- ・本編に登場しないキャラが出てきます。
- ・てか主人公です。

・地中海の三人組も、性格が合っていないかも知れません。

・トルコさんがヤンデレです。流血表現あるかもです。

・多分、史実と違います。

・下手くそです。

・下手くそです。

・下手くそです（殴

こんなですが、良かったら宜しく願いします（・o・）ノ

↓キャラ紹介↓

は想像キャラです。

←

ライラ（古代エジプト〜イスラム帝国、アラビア）

グプタのお母さん。場所が場所なので肌は日に焼けている。量の多い黒髪で絶世の美女。性格はクールで、なんか第六感みたいなものを使いこなす謎の多い女性。めったにないが、怒らせるといろんな意味で怖い。子供一人気絶させるくらい簡単。アテナとの仲はとてもいい。

アテナ（古代ギリシア〜ビザンツ帝国）

ヘラクレスのお母さん。ちょっとだけ日に焼けている。茶髪のふわふわの癖毛で、分かる人には分かる二葉みたいな形の毛が一本飛び出てるこれまた凄い美女。性格は温厚だが、ものすごい負けず嫌い。あと色恋にやたら疎い。暇な日はライラの家遊びに行ったり、息子と星座の話をしたりする。

サディク（トルコ）

おっちゃん…いや、この時はまだ若い。江戸っ子口調。アテナさんに恋心を抱くも全く気づいて貰えないことや、ヘラクレス（まだ子供）に何故か懐いて貰えないことなどは、主にライラさんに相談してる。あと、この時はまだ例の仮面は付けていない。

グプタ（エジプト）

肌の色はライラさんと同じ。よく喋るが何故か無口だと思われがち。よく腹黒い面が出るが、言動は紳士的で優しい。

ヘラクレス（ギリシャ）

アテナの息子、通称ヘラ。肌の色と髪の色、謎の二葉みたいな一本毛、隠れ負けず嫌いな性格は母譲りで、そして究極のマイペース。喋る・行動するスピードが遅め。サディクのことを異常に嫌い。

こんなもんですね。

はじめに（後書き）

改めまして…

お初にお目にかかります、私エルナと申しますm（　　）m

SSラブってところに載せてる小説をここでも書くっていう、生意気なことをしてみた。↑ 去ね

ちなみに作者は地中海組の熱狂的ファンです！！

出来れば生暖かい目で見守ってやって下さいまし。

プロローグ（前書き）

タイトル通りです（＾Ｏ＾）／

プロローグ

「俺の家の神話に、キュプロクスっていう…一つ目の怪物が、いるんだ」

ふと、ヘラクレスが口を開いた。

「それで…誰かが、こんなことを言ってた。

『この怪物は、あまりに愛しい人をずっと見ていたせいで、元々2つあった目がどんどん寄って、1つになってしまったんだ』…って」

グプタは、彼のその話をただ黙って聞いていた。

それで結局その怪物はどうなってしまったのか…とも、自分はその見解をどう思うのか…とも、あえて聞き返さなかった。

彼―ヘラクレスの過去に起こったことを、グプタはそのすぐ近くで見してきた。

それに、彼の足がさつきからずつと震えていることも、グプタはとうに分かっていたのだ。

蘇ったのは、彼らの子供時代の記憶。

は想像キャラです。

←

ライラ（イスラム帝国、アラビア）

グプタのお母さん。場所が場所なので肌は日に焼けている。量の多い黒髪で絶世の美女。性格はクールで、なんか第六感みたいなものを使いこなす謎の多い女性。めったにないが、怒らせるといろんな意味で怖い。子供一人気絶させるくらい簡単。アテナとの仲はともいい。

アテナ（ビザンツ帝国）

ヘラクレスのお母さん。ちょっとだけ日に焼けている。茶髪のふわふわの癖毛で、分ける人には分かる二葉みたいな形の毛が一本飛び出てるこれまた凄い美女。性格は温厚だが

ブログ（後書き）

これがブログです。

ちなみに、この会話は1800年代のものだと思ってください？

第7話までは、コピーを貼るだけなので更新早いですよ。

第1話（前書き）

アラビアさん、ビザンツさん登場です（＾Ｏ＾）／

第1話

時は紀元前。

「今日も暑くなるんだろうね」

朝の仕事を済ませそう呟いたのはライラ、この時代の北アフリカを統べる「イスラム帝国」でもある女性だ。

彼女の息子のグプタは、手伝いを終え彼女の隣にちょこんと座る。

「さて、」

「居るのは分かっているんだ、そろそろ出て来たらどうだい——ア
テナ」

彼女が問いかけた先の物陰に、反応はない。

苦笑してもう一度声をかけようとした矢先、さっきの物陰からひよっこり顔を出したのは。

「ちょっとー、なんで分かるのよ、ライラあ！今日こそびっくりさせようと思って隠れてたのにー！」

「今日こそって、今で何回目だい？私でなくとも、次にあんたが出てくる場所くらい」

想像はつくだろうよ、と言おうとして止めた。

その女性「アテナが、もはや自身の話など全く聞いていなかったためだ。ついてきた息子のヘラクレスに「動いてなかったわよね？」と確認を取ったりしている。」

ビザンツ帝国のアテナ。

彼女は、暇が来ると大体ここへ遊びに来る。そして、ほぼ毎回何か悪戯的なことを仕掛けるがいつもライラに見破られて悔しがるが、全く懲りない。

そんな彼女にライラは呆れたようにため息をつくが、顔はどこか楽しげである。

年の近いグプタとヘラクレスも遊び始めた所で今日も始まった、二人の世間話。

「家のお隣さんねー、ローマさんっていうんだけど、なんかこう、色々凄い人なのよー」

「ああ、私も知っているよ。あの人は凄いというか……私には良く分からない人だ」

ライラがそんな返事を返す。いつもと少し違う彼女の様子に気づいたアテナは、思った事を問うてみた。

「そっいえば、この間ローマさんがあんたの所に軍出したみたいだったけど、あの時なんかあったの？」

ライラはよくぞ聞いてくれた、と言わんばかりに微笑んだ。話しかかったようである。

第1話（後書き）

おはようござーます、エルナです（＾Ｏ＾）／
今回はおしゃべり編。次回はライラさんの回想と、おしゃべりが終
焉を迎えます。

第2話（前書き）

第2話です。

あとがきに大事なこと（？）が書いてあるので、読んでください。

関係ないけど文中の「エルサレム」をずっと「イスラエル」って書いてて友人に指摘されるまで気づかなかった自分乙ww

第2話

ある時、彼女の耳にその情報は届いた。

「ローマ帝国が、イスラム帝国のものとなった『エルサレム』を奪回するため 十字軍 を引き連れ攻めてくる」と。

エルサレムは、彼女の心臓部のようなものである。これをほつておく訳には行かない。

彼女はいつもは下ろしている黒髪をざっくり束ねると、直ぐに戦の準備を始めた。

そして、時は来た。

軍の統制をとりつつ、彼女はローマ帝国らしき人を探した。実は二人は初対面だったからだ。

しばらく経って、向こうから軍隊がやってくるのが見えてきた。十字軍である。

彼女は武器を構え声を張り上げた。

「私こそはイスラム帝国！！さあローマ帝国とやら、互いの大切な場所を賭けて、いざ聖戦といこうか！！」

…

…

…

…あ、あら？

おかしい。絶対に聞こえている筈である。

しかしながら、そのローマ帝国らしき男は驚いたように彼女を見つめるばかり。

反応がないのだ。

緊迫したと言つには程遠い、どこか間の抜けた沈黙が辺りを包む。

しばらくして、ローマ帝国は急に口を開いた。

「ーそのベッラー！！」

「……………は？」

彼女にとっては全くもって訳の分からない展開であった。

ローマの立場から考えてみよう。

彼は正直、イスラム帝国のことをあまり良く思っていなかった。

自分と同年くらいのおじさまが来るに違いないと思っていたのだろつ。

ところがどうだ。

現れたのは彼よりうんとこさ若い絶世の美女・ライラ、好戦的な笑みを浮かべる様は何時にも増して凛々しく美しい。

しかも、彼女の軍隊はスピードが武器のため装備は非常に身軽なのだ。よって、子供が1人いるとは思えない彼女の抜群のスタイルもばっちり見える。

こんな素敵な女性を彼がみすみす逃す訳はない——天下のローマ帝国さまが聞いて呆れるが、つまり、そういうことなのだ。

「いや、イスラム帝国さんがこんな美人だったなんて!!うちの上司が変なこと言っちゃってすみませんねえ。お詫びにこれから一緒にお茶にでも……ぐおっ!？」

彼…ローマ帝国は兵士に引きずられながら去っていった。残されたライラは1人呟く。

「エルサレムは……?」

「あつははははは！！確かにローマさんならやりかねないわ！！」

「私も最初はびっくりしたね。あんたも同じ目にあつたことはあるのかい？」

「あるある！！私なんかお隣どうしだから、何かと関わる機会が多くてねー」

それから色々とお隣さんの話が続いたが、ライラがふと重要なことを思い出し、さり気なく訪ねた。

「そういえばあんたにはもう一人隣人がいるそうだが、そちらはどうなのだい？」

「いえ、特に関わりはないし、分からないわ。オスマン帝国さんだっけ…名前は忘れちゃった」

しれっと言つてのけるアテナ。

彼女らしいがしかし残酷な答えに、その「隣人」を知るライラは苦笑いをかみ殺すのだった。

第2話（後書き）

毎度どうもありがとうございます（；；）／

大事なことは…読者様（↑いるのかな）にお聞きしたいことがあるんですよ。

最近、世界地理の授業で偶然「現代の中東について」みたいなことをやって、

エジプトとイスラエルの関係に萌えました。（；）

で、興奮の最中に友人と話をしているうち、「イスラエルちゃん」なるキャラが出来てきまして…

この二人を短編小説にしようと思うんです。

ですが、コレを実行すると、深刻な時事問題が絡んできてしまったり（無論、頑張って失礼なことを書かないようにしますが）して、不快な思いをする方がいらっしやるかも知れません。

そこで、勝手な話ですが読者様（↑ほんとにいるのかな）の意見を聞きたいんです。

すみませんが、どうかご協力お願い致しますm（；；）m

一応、イスラエルちゃんの設定載せときます（不適切なようなら消します）

おんにゃのこ。文化の違いからか、ご近所さんからは浮きがち。不器用。かなりツン濃度の濃いツンデレ、と言うかデレたところを見たことがある人は殆ど居ない。でもイギリスとの仲もそれほど宜しくないのです、それ言うと怒られる。過去の経験のせいかな意地っ張り。

です。

第3話（前書き）

第3話です（＾Ｏ＾）/
サデイクさん登場！！

この時彼は仮面付けてないです。
え、でも本家様のオスマン帝国時代付けてたじゃんとか今は言わな
いで下さい（＜＞）

第3話

アテナが訪ねてきてから数日後。

ライラはまた、家で来客を待っていた。

「彼」が事前に連絡をしてライラと話をしたがる時は、決まって相談事があるのだ。

彼の顔を思い浮かべると、折角忘れようとしていたアテナの一言が思い出され、込み上げる笑みを押し殺す。

——アテナも、何故あそこまで周囲の男の感情に気づかないのだろう。こんなことでよくあんな大国になれたものだ——

彼女がそんな考え事をしている間に、ざつ、と馬の止まる音がした。

「ああ、いらっしやい。中に入りな…サディク」

「おう、いつも突然すまねえな、先生。邪魔させてもらっぜい」

サディクと呼ばれた男は、ライラに促されて席に座る。

しばらくすると、ライラがこう切り出した。

「それで？今日、お前がここに来た訳は」

「ああ…その、こないだの…アテナさん…の話、ってえのを」

ここでライラは、吹き出しそうになるのを堪えることになる。

「やはりその話か…最初に言っておくが、これから話すことは残念ながら本当のこと。お前をからかうための作り話ではないから…ね」

サディクはここ一連の話の流れから何か不吉なものを感じたらしく顔をしかめたが、それでも愛する人の話が聞けるのならと身を乗り出した。

ライラはサディクにばれないように溜め息をついて、切り出した。

「こないだ奴が遊びに来た時、話の流れでそれとなく聞いてみたんだよ——お前にとって、サディクはどういう存在かと」

「それで、あの人は何て？」

少し渋って、答える。

「そう聞いたらあいつ……はあ。いいかい、私は、かわいい教え子のために思っであえて真実を言うのだからね——よく知らない——らしい。名前すらろくに覚えられていないようだ」

それを聞いたサディクは「そうか……そうかそうか……」と、いかにもらしくうなだれる。

そんな反応に気が抜けたように、ライラはくすりと笑った。

「まっつたく、私の知る限りのお前は呆れるくらい大胆なのに、何故恋愛になるとこんなに不器用になるのだい？ 私にはさっぱり分からないね」

「そつ… そんなもん、俺に聞かれたって知らねえよ！！」

「ふふつ。 お前もかのローマ帝国のように、馬鹿みたいに積極的になればいいのに。 あの人のことは、アテナも楽しそうに話していたし」

「……サディク？」

ライラは気づいて、ぞつとした。

彼のオレンジ色の瞳に常にあった、まっすぐな光が刹那、姿を消した。

長い間一緒にいた仲ながら、彼からは一度も見たことがなかった、姿。

駄目だ、と本能が叫んだ。 このままでは、自分の知るサディクが居なくなってしまう。 誰か、いや何か別の、『モノ』に、サディクを乗っ取られてしまう。

「——っ、サディク!!」

ライラは、とつさにサディクの肩にしがみついた。
さすがに彼も驚いたらしい。

「!?!? なっ…急にどうしたんでい、先生?」

「…大丈夫か?」

「あ、ああ…」

「そうか…良かった…」

それでも、ライラの不安は消えなかった。

第3話（後書き）

さあ、怪しくなってきましたよ↑

ご想像通り、次回はヤンデレらしきものが入ります。

殺っちゃうとこまでは行かないと思いますが、狂気っぽいものが苦手な方は逃げてー！超逃げてー！！

こんなんが書くので、大したことはないですが…

あと、昨日書いた事に対して何の反応もなかったんですが、これはGoサインですかー？
書いていますよー？

第4話（前書き）

わー、ひさびさー!!

火野村祭さん、コメントありがとうございました（＾w＾）

第4話

あの時の自分は、一体何だったのだろう。

ライラの家から帰ってきたあと、サディクは悶々と考えていた。

いつも冷静なライラが、あの時ばかりは焦りを隠せていなかった。

いや。

焦り、というのか、

—恐怖—というのか。

あの時のライラは明らかに様子がおかしかった。

その目はまるで、サディクの中に化物を見たかのように。

そしてもうひとつ、どうしても気になることがあった。

あの時……

…自分が、考えていたこと。

(俺は――)

その時。

数日前に覚えたあのどす黒い感情が、サディクの脳内を侵食し始めた。

俺は、あの人と知り合ってからずっとあの人のことを好きだった。

その時から今まで、ずつとずつとずつとずつとずつと好きだった。

なのにあの人は俺のことなんざ見ちゃいない。

今までも、そしてこれからもそうだ。

欲しい。

あの人^が欲しい。

欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい

タトエ、ドンナスガタデアツテモ。

タトエ、ドンナカタチニナツテモ。

俺ハアノヒトノスベテガホシイ。

俺が、あの人を殺せば。

あのひとの目も鼻も耳も唇も手も足も脳も心臓も、すべて、

俺のものに、
できるんじゃないか？

「……！！」
目を覚ましたサディクの理性が、欲望に歯止めをかけようとする。

欲しい。
駄目だ。
欲しい。
駄目だ。
欲しい。殺せ。
駄目だ、絶対に。
欲しい。殺せ。
駄目だ、出来ない。
欲しい。殺せ。
そんな事をしたってあの人は。

欲しい。
欲しい。
欲しい。
欲しい。

「コロセ」

愛しい人の笑顔が、

彼には絶対に手に入らない愛しい人の笑顔がその脳裏を掠めたとき、

彼の理性は、壊れた。

ふと気がつけば、サディクは真っ直ぐにその場所に向かっていった。

懷に隠し持っているそれが何なのかを確かめたとき、ついさっき消し飛んだはずの理性が頭の片隅で叫ぶ。

（おい、止まりやがれ『俺』！！）

彼の足は止まらない。

まるで自分が自分でないようだった。

夢の中の人物に語りかけるような感覚。
焦燥感。

（おい貴様、今何しようとしてんのか分かってんのか！？）

彼の足は止まらない。

（おい、待て…頼む、止まってくれ！！）

彼の足は止まらない。

光を失った「彼」の瞳が、アテナの後ろ姿を捉えた。
ゆっくりと、懷の物に手を伸ばす「彼」。

（貴様、まさか本当に？）

手にした短剣。

徐々に距離を縮める。

アテナはまだ気づいていない。

（止める…）

相手のすぐ後ろまで来た。

短剣を振り上げる。

（止める、）

そのまま彼女の背中に――

（（止めるおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！））

「彼」が「サディク」に戻り、瞳には再び光が宿った。

しかし、その瞳が映し出したのは『絶望』だった。

振りおろさるた刃の勢いは、止まらない――

第4話（後書き）

すいません遅くなりましたあ？

テストも終わつたしこれから頑張ります…と言いたいが後の話の展開が思いつかないorz

ところで小話。

ビザンツ帝国は、門番さんがお城の鍵を閉め忘れちゃったせいでトルコに攻められて滅んじゃったそうです。

ちょ、門番おまww

しっかりしようww

ア「やだぁー、わたしったら家の鍵閉め忘れちゃったみたいねー（笑）」

ところでオスマンさん、わたしに何かご用かしらー？」

第5話（前書き）

お久しぶりでーす!!

第5話

嗚呼、もしあの時の彼が、支配欲に完全に脳内を乗っ取られていたなら。

理性が残っていなかったなら。

きっと、あんなに苦しい思いをすることはなかっただろう。

短剣の先に、感触。

正気を取り戻したサデイクの視界へ、絶望の色が一杯に広がった。

嗚呼。

目の前に、愛しい人。

彼女をこんな姿にしたのは紛れもない——
サデイク自身、なのだ。

「う、ああああああああ　ああああああ　……！！！！！！！！
！！」

その日の朝から、ライラの身体は違和感を訴えていた。

病気の予兆ならあまり身体に無理をさせてはいけないからと、グプタに今日は休むように言われていたが…

彼女も長く生きている。

そうではないことは十分にわかっていた。
悪い胸騒ぎがしてならないのである。

（きっと今、何かとんでもなく悪い事が起ころうとしている…）
（私の身近な人には…）

はっ、とした。

数日前のあの感覚が、ライラの脳内を駆け抜ける。

サディクと会って、
アテナの話をして、
ローマさんの名前が出てきて、それから。

それから。

「！！！」

稲妻に打たれたように、頭の中で出来上がっていく最悪のシナリオ。同時にライラが思い出したのは、無邪気な親友との会話な断片だった。

『ねえねえライラ、うちの神話ってば凄いのよー！！最近むこうの人達と話題になったんだけど、キュプロクスっていう巨人の話があったねー…』

（――アテナが危ない！！）

愛を抑えきれなくなった者の悲劇など、自分は今まで何度も見てきたではないか。ああ、なんてことだ！

もう、居ても立っても居られなかった。
騒ぐ頭を抑えながら、ライラは駆け出した。

「母さん、調子は… 母さん？」

第5話（後書き）

どうも、エルナです。

散々待たせてしまった結果がこれですか。すみません（T|T）

次話が第1期最終回となります… たぶん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1998r/>

キュプロクスの瞳

2011年4月15日22時59分発行